

皮心伝心

ローテクこそハイテク？

——本当に皮膚科医が失ってはならないものとは——

昨近は皮膚科に限らず、どこもかしこもバイオ祭りの様相である。今後もさまざまな新薬が導入されそうであるが、それらの新薬は総じて高額である。他科の若い医師(決して当教室のではない)の少なくとも一部では、新薬を使うのは名医で高度な医療をしている、かのようなイメージを抱いているのに接したりもする。知らず知らずのうちにお祭りで踊らされているのではないか(若くはないが自戒もこめて)。とりあえずこのバイオで反応をみよう、などという振る舞いに接することもある。そして、安くて優れた治療(ローテク)の使い手が減ってくるのかもしれない。さらにやっかいなことに、皮膚科の診療ではローテクにこそ皮膚科医の存在価値を際立たせる技の数々が含まれている。にもかかわらず、それらはさして皮膚科の売り上げに貢献しない。本来、低コストで最大の効果を引き出す医師こそが名医として崇められ、医療経済上ももっとも評価されるべき存在のはずであるのに、日本ではそうはなっていないように思える(安くてよい医療には研究費が集まりにくいのかもしれないが?)。ここでいうローテクにはステロイドの外用治療という基本的な手技も含まれる。

そして驚くべきことに、ステロイド外用薬を含むさまざまな外用治療の技術が皮膚科専門医(私も含めて)であっても未熟であることが、アトピー性皮膚炎の治療にバイオが導入されつつある現況において明確になってきている。他科の医師からすると(もし知れたら)この事実は極めて驚くべきことである(ローテクのはずなのに!)。外用治療の達人と信じていた皮膚科医が、必ずしもそうではないと知ったとき、他科の医師はどういう行動に出るのだろうか。詳細な皮膚の観察とその経験の蓄積を基に、外用薬をはじめ昔ながらの薬を自由に操り、治してしまう医師に出会ったとき、その高度な技(ハイテク)に驚嘆し尊敬の眼差しを送ることだろう。そしてその領域にAIが踏み込むのはまだまだ難しいように思う。

私は、今、アトピー性皮膚炎の治療でバイオを開始するたびに敗北感に襲われる(よくなった患者さんの笑顔には救われるが)。さまざまなガイドラインが出ているが、それはそれでとても参考になる。一方で、ローテクの高度な担い手を育てること、経験のある皮膚科医にしかなしえない秘伝の技(?)をいかに伝えるかにも注力すべきときと思う。秘伝の技の実践や教育はおそらく大学の教授たちにとって決して得意とはいえない領域とも思われる。皮膚科にとってローテクを駆使する高度な技(ハイテク)を失うことのほうが、AI進出より恐ろしいことではないかと思う今日このごろである。

波多野 豊

(大分大学医学部皮膚科学講座教授)